

他にもこんな意見が出ました！



さて、めざす社会に関してはいろいろな意見が出ました。  
この後は、それを実現するための具体的な行動を考えていく必要があります。  
これがなければ、ただの夢に終わってしまいます。  
皆さんは、どんな社会をめざしますか？  
私たちと、一緒に考えてみませんか？  
ご意見を頂ければ嬉しいです。

### ユースワークがめざす10年後の社会のヒントについて、

青少年教育や体験活動について実践や研究を重ねている  
青山鉄兵さん(文教大学人間科学部准教授)に伺いました。

## スウェーデンで見えてきたもの



青山鉄兵(文教大学)

昨年11月、いっこうに太陽が姿を見せない薄暗いストックホルムに滞在し、彼の地のユースワークを視察する機会に恵まれた。

おしゃれなユースセンターを見たり、素敵な職員と出会うことができたのは有意義だった。しかし、1週間にわたる視察で一番印象に残ったのは、そうした現地の先進的な施設やワーカーのあり様ではなく、むしろ、その前提となるユースワークと社会の関係だった。

一つは、訪問する先々で、ユースワークの土台となる価値として「民主主義」という言葉を何度も聞いたことだ。若者も、ワーカーも、ユースワークについて語る時にはいつも「民主主義」を口にしている。実践の目的を聞けば「若者が民主主義を学ぶこと」が挙げられるし、ワーカーの養成課程にも「民主主義の理解が位置付けられていた。このスウェーデンの「民主主義」をどう理解するか、ということは今後大きな宿題なのだが、少なくともスウェーデンでは、「民主主義」は教科書の中だけにある言葉ではなく、一人ひとりの自由で多様な生き方を尊重しながら社会を作っていくための共通の理念として位置づいており、こうした理念に基づくことが、ユースワークの前提(スタート)でもあり、目標(ゴール)でもあると捉えられているようであった。ユースワークに携わる人に、ユースワークの土台となる価値が共有されていることや、そうした価値のもとで施設の運営やワーカーの養成がなされていることがとても印象的だった。

もう一つは、若者の余暇に対する社会の信頼を感じたことだ。訪問先のあるスタッフは「ユースセンターで何が起るかを決めるのは自治体であり、住民であり、納税者だが、こういった活動が残っているのは、「余暇」という価値が認められているからだ」と述べていた。ここでの「余暇」は、単に学校や仕事以外の時間のことではなく、その時間に内在する「自由」や「遊び」にこそ意味があるものだろう。近年、ユースワークの周辺にも「費用対効果」や「エビデンス」やら「課題解決能力」といった「生産的」な言葉が溢れる中で、若

者の余暇を余暇として尊重することは容易ではない。しかし、生産性や効率性を土台とした学校や社会のあり方自体が若者の生きづらさの背景にあることを思えば、こうした余暇に対する信頼が社会に共有されていることがとても貴重なことに感じられた。

さらに重要なのは、ここでの「民主主義」と「余暇」は別々のものではない、ということだろう。スウェーデンの若者団体における自治へのこだわりを見ると、民主主義は、自分たちの余暇(自由)を自分たちで守るための仕組みでもあることにも気づかされる。ここでは、余暇の中で民主主義が育まれ、民主主義の中で余暇が余暇として守られている。スウェーデンのユースワークにもさまざまな課題があるし、向こうのやり方が全て素晴らしいというつもりもない。ただ、ユースワークがめざす10年後の社会を考えるとき、スウェーデンにおけるユースワークと社会の関係には、さまざまなヒントが含まれているように思う。